

Title	<サーヴェイ論文>プラグマティズムと実在：パースの実在概念と実践的実在論をめぐって
Author(s)	加藤, 隆文
Citation	Contemporary and Applied Philosophy (2019), 10: 93-113
Issue Date	2019-06-05
URL	https://doi.org/10.14989/242238
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

プラグマティズムと実在：パースの実在概念と 実践的実在論をめぐって*

加藤隆文

概要

While William James's lecture at Barkley in 1898 made pragmatist thoughts popular, the founder of pragmatism, Charles Sanders Peirce, found James's pragmatism unsatisfactory, and began to call his own thought 'pragmaticism' in order to differentiate it from James's. This paper aims to argue for the potential impacts that Peirce's pragmaticism may have on the contemporary philosophical discussion about propositional attitudes. Peirce claims that the general laws actively operating in the natural world are real. Although it is the physical laws that Peirce keeps in mind in arguing for this unique realism, this paper would like to assume that 'the law of mind', on which Peirce expands in a paper published in 1892, is really operative in the human mind, and therefore it can also be considered as real. In this realism, it is not physical objects but semioses which are regarded as real.

This paper clarifies the contemporary significance of Peircean pragmaticism and realism, by comparing them with L. R. Baker's Practical Realism (PR). Because PR explains propositional attitudes in terms of collective sets of subjunctive conditionals, PR seems to share this core idea with pragmaticism. Moreover, PR argues that propositional attitudes cannot be reduced to physical states of brain, and that propositional attitudes are real in the same sense that bankruptcies are real. This view may be considered as keeping in step with Peircean realism. Peirce sustains, however, a peculiar attitude toward scientific inquiries and naturalism, which leads to his argument for 'normative sciences'. Although Baker contends that she takes a position opposed to naturalism, PR is compatible with subject naturalism held by a prominent neo-pragmatist, Huw Price. On the other hand, Peirce's anti-naturalism would add a complex colour hue to the texture of the neo-pragmatists' discussion. Based on these observations, this

* CAP Vol. 10 (2018-2019) pp. 93-113. 受理日: 2018.09.07 採用日: 2019.05.09 採用カテゴリ: サーヴェイ論文 掲載日: 2019.06.05.

paper argues that Peirce's thought can make a unique contribution even in the contemporary context.

Keywords: Charles S. Peirce, propositional attitudes, realism, pragmatism, naturalism

はじめに

プラグマティズム創始者のひとりパースは、一八七八年にいわゆるプラグマティズムの格率を提示して以降も、自身のプラグマティズム思想を洗練させ続けた。彼は一九〇〇年代初頭に、幾通りかの方法で、プラグマティズムの再定式化を試みている。一方、当時までにジェイムズがプラグマティズムの思想を一般に広く知らしめていたが、パースはこれに納得せず、自身の思想をこれと区別して「プラグマティシズム (pragmaticism)」と呼称し始める。本稿は、態度の実在性をめぐる現代の議論に注目することで、パースのプラグマティシズムの現代的意義を展望するものである。

本稿筆者は過去に、パース記号論に基づいた命題的態度の理論を提案した (Kato 2016)。しかしその際、「スコラ的実在論 (Scholastic Realism)」というパース独自の実在論を、命題的態度の実在性をめぐる現代の議論の中でどう受け止めるかという問題が未解決のまま残っていた。パースは、自然界で実際に作用している一般的法則を実在 (real) と見なす。こう論じる際にパースが念頭に置いているのは物理法則だが、他所で彼が論じてきた「心の法則」*¹もまた人間の心の中で実際に作用している一般的記号過程であり、これを実在のものと見なす立場が可能であると本稿筆者は考えている。この実在論において実在と捉えられるのは物理的対象ではなく記号過程である。

本稿は、パースの実在論の意義を、態度の実在性をめぐる現代の議論の文脈において問う。それに際して、ベイカー (Baker 1995) が提案する実践的実在論 (Practical Realism) に注目する。というのも、この理論は、命題的態度を仮定法的条件文の集合によって説明するという考えを含んでおり、この考えはプラグマティシズムに基づく命題的態度の理論に類似すると考えられるからだ。さらに、実践的実在論は、命題的態度は脳の物理的状態には還元されないと考え、例えば「金融機関の倒産」が実在するというのと同様の意味で、命題的態度は実在すると主張する。この点はパースのスコラ的実在論と親和的であると思われる。これらの議論を踏まえ、本稿は、パースのプラグマティシズムが態度の実在性をめぐる現代の議論において示しうる意義を描出する。

1 命題的態度についてのプラグマティックな捉え方

パースが自身のプラグマティズムの主張を定式化した文言として最も有名なものは、一八七八年の論文「私たちの観念を明晰にする方法」*²において提示されたいわゆる「プラグマティズムの格率」であろう。

*¹ “The Law of Mind”, *EPI*: 312-333, 1892.

*² “How to Make Our Ideas Clear”, *EPI*: 124-141.

しかしその後、彼のプラグマティズム思想がさらに洗練されてゆくに従い、プラグマティズムの主張の定式化の仕方も修正されていった。まずは、パースが一九〇三年のハーヴァード大学での連続講義において定式化した「プラグマティズムの原理」を確認しておきたい。そして、この原理に基づいて、続く第2章でペイカーの命題的態度の理論との接続を試みる。

一九〇三年の「プラグマティズムの原理」とは、次のようなものだ。

プラグマティズムとは、直説法の文で表現可能な理論的判断は全て、思考の混乱した形式であり、もしそれが意味を持つならば、その唯一の意味とは、命令法の帰結節を持つ条件付きの文として表現可能なものに実際的に対応している格率を実効化する傾向のなかにある、という原理である。
(EP2: 134-135)

直説法で表現される判断では、個々の具体的事例における判断しか言い表せない。つまり、例えば「ダイヤモンドは硬い」という直説法の表現は、具体的な個々のダイヤモンドに傷をつけようとする実験などを通して得られた判断の表現であると考えられるが、これは実験対象となったダイヤモンドについての判断でしかなく、ダイヤモンド一般についての判断を述べることにはならない。この点が、一八七八年の「プラグマティズムの格率」では未解決であった問題点である。しかしそれから四半世紀を経て、最終的にパースは、シンボルの意味とは「そのシンボルを受け入れることによって生じるところの、合理的行為がもつあらゆる一般的様相の総体」(EP2: 346, 1905)に存していると考えに至った。ここで言われているシンボルとは、習慣的な結びつきによって対象を表す記号過程であり、一連の推論過程や一般法則もこれに含まれる。パースは、直説法ではなく、「～だろう(would)」という仮定法を用いることでこうした習慣的なものを表す必要があると考えるようになった。こうしたいわゆる後期プラグマティズム^{*3}に従えば、「ダイヤモンドは硬い」という直説法の命題で表現される判断の意味とは、ある主体が仮にそうした判断をしたならばいかなる合理的行為をなすだろうか、ということの総体に存している。要するに、判断の意味は、直説法で表される命題に存しているのではなく、当該の判断をしている主体を仮定すれば、その判断はその主体にどういった行為をさせる(つまり、これこれの判断をしているならば何々をせよという命令法の帰結節を伴う)傾向を持つのかということに存している。

本稿では、パースのプラグマティズムを現代の心の哲学の議論と接続するという関心から、この「プラグマティズムの原理」を、命題的態度の意味論を提供する理論として読み替えたい。実際、パースのこの原理は「理論的判断」の意味をめぐる主張であり、つまり、これこれと判断しているという命題的態度を行動傾向に還元して説明する原理である。また、この原理を現代風に解釈すれば、この原理の背後には、習慣を媒介として命題的態度と行動のネットワークが形成されているという発想があると見なせるだろう。こう

^{*3} 本稿では、一八七〇年代の「前期プラグマティズム」と対比して、一九〇〇年ごろ以降のパースのプラグマティズムを「後期プラグマティズム」と称している。この用語法は伊藤(1985)の見解を踏襲している。また、伊藤(1985)は、前期プラグマティズムから後期プラグマティズムに至る過程で、プラグマティズムの格率がいかにして一般者に言及できるように修正されたのかを、詳しく説明している。

して先述の説明は、こう言い直される。パースの後期プラグマティズムに従えば、「A は硬い」という命題を含む信念や欲求といった命題的態度の意味は、その態度を有する主体がどういった入力においてどういった出力をする習慣を確立しているのかに存する。この習慣の総体が、その態度の意味である。

この考え方に則れば、命題的態度の意味の分析は次のように行われる。例えば、発疹が出ているのを見て、麻疹であると判断し、病院へ行く、という過程を考えてみよう。「麻疹である」という理論的判断は、「発疹が出ているならば、麻疹であると判断せよ」という理論を参照してなされる判断であると考えられる。さらに、この判断がなされれば、「麻疹ならば、麻疹を治療するための適切な行動をとれ(病院へ行け)」という文の条件節が満たされ、それによって主節の命令文は実際的な効力を持つ。判断「麻疹である」の意味は、こうした習慣的傾向のうちにある。このことを定式化すると、

〈1〉ある命題的態度 A の意味 M(A)は、「C ならば X」となる[C, X]の習慣的傾向性の総体(※C は状況入力、X は命令文)

となる。

ただし、フックウェイ(Hookway 2004; 2012: ch.9)が指摘するように、この後期プラグマティズムの時期におけるパースのプラグマティズムの定式化には、若干の振れ幅が見受けられる。例えば、一九〇七年のパースによる後期プラグマティズムの説明は、前掲の一九〇三年の命令文に言及した定式化とは微妙に異なっている。

知的概念が述定していることの総体的な意味(*total meaning*)は、所与の種類の概念可能なあらゆる状況の下で、その述定を伴う主語がある特定の方法で振る舞うだろう(あるいは振る舞わないだろう)(*would (or would not) behave*) [...]と断言すること(*affirming*)に存しているということ——この命題をこそ私は、プラグマティズムの核心と考えている。(EP2: 402)

こちらの定式化では、条件文を念頭に置いていることは先の定式化と同様であるが、その帰結節は命令文ではなく、*would* を用いた仮定法で断言される文になっている。この定式化に従うならば、命題的態度をプラグマティックに理解する方法としては、次のようなものも可能であろう。

〈2〉ある命題的態度 A の意味 M(A)は、「C ならば X」となる[C, X]の習慣的傾向性の総体(※C は仮定法的条件文の前件、X は *would do* の形で断言される仮定法的条件文の後件)

本稿では、〈1〉と〈2〉両方の解釈の可能性を残しておきたい。というのも、フックウェイも述べるように、これらが背景にしている二つの(後期)プラグマティズムの定式化にはそれぞれに特有の利点があるからだ。一九〇三年の定式化ないし〈1〉の解釈は、命令文の形をとっていることにより、自己制御を確立した自我が自分に向けて課す指令の意味合いを持つ。つまり、未来の自己という記号過程の彫塑に向けて規範

的な習慣を確立させてゆこうという努力の側面を想起させる。他方、一九〇七年の定式化ないし〈2〉の解釈は、一八七八年のプラグマティズムから継続している、科学的探究における条件―帰結形式での対象の解明という態度^{*4}と一貫しており、探究のために観念を明晰にする理論としては、〈1〉よりも目的に適っていると思われる。パースのプラグマティズムと科学的探究の関係については、本稿第4章で再論する。

次章では、ベイカーの実践的実在論が、後期プラグマティズムを踏襲したこうした命題的態度の理論と類似した発想を含んでいることを見てゆく。

2 ベイカーの命題的態度理論

先に種明かしをすると、ベイカー (Baker, 1995) は命題的態度を、ある主体 S についての対になった假定法的条件文の集合的総体と捉えている。本章では、彼女がそうした理論を導出する過程を追う。

ベイカー自身の例に従って、S はクリントンが大統領だと信じている、という (S の) 命題的態度を考えてみよう。ひとまず近似的に、この命題的態度は、次のような假定法的条件文として理解できそうだ。

〈S が大統領は誰かと尋ねられ、S がその質問を理解し、S が質問者に協力的であろうとするならば、S は「クリントンが大統領ですよ」と言うことによって応答するだろう (would respond)。〉^{*5}

さて問題は、この条件文が十分に問題の命題的態度を表せているのかどうかだ。「十分に」というのはつまり、この条件文が真ならば S は信念〈クリントンが大統領だ〉を抱いていると言えるのかということである。条件文は假定法の文 (英語では *would* を使って書かれる文) であるため、条件文の真偽を確認する際には、実世界になるべく近い可能世界を想定して、その世界において条件文の前件が満たされるならば後件が成り立つのかどうかを確認することになる。実例を色々と考えてゆくと、果たして、やはり、いくつかの問題が生じてしまう。そのため、ベイカーはそれぞれの問題を解決することを通じて条件文の作り方を改良してゆく。

まず次のような場合に生じる問題を解決せねばならない。^{*6} ピーターはポールに、マリーの電話番号を尋ねる。ポールは電話帳をめくってマリーの電話番号を見つけ、「765-4321 だよ」とピーターに言う。さて、この事例において、ポールが「マリーの電話番号は 765-4321 である」と信じていることを、次の条件文で十分に表せるだろうか。

〈ポールがマリーの電話番号は何かと尋ねられ、ポールがその質問を理解し、ポールが質問者に協力的であろうとするならば、ポールは「765-4321 だよ」と言うことによって応答するだろう。〉

^{*4} この一八七八年のプラグマティズムに関する理解は、伊藤 (1985: 74) の記述にならった。

^{*5} Baker (1995: 159) の記述に基づく。なお、以下、Baker (1995) は *EA* と略記する。

^{*6} この議論は *EA*: 161-2 の記述に基づく。

ベイカーは、この条件文が真となるはずの可能世界において、ポールがマリーの電話番号は 765-4321 であると信じているとは限らないと論じる。彼女の議論によると、ポールはただ電話番号の調べ方についての信念しか有していないという場合がありうる。例えば、ポールはマリーの電話番号を尋ねられたら毎回参照する電話帳を手元に置いているが、「マリーの電話番号は 765-4321 である」という信念は有していないような場合だ。こうした場合があるとすると、先に掲げた条件文は問題の命題的態度を十分に表せているとは言えない。ベイカーによると、この問題を解決するには、条件文を次のように修正すれば良い。

〈ポールがマリーの電話番号は何かと尋ねられ、ポールがその質問を理解し、ポールが質問者に協力的であろうとするならば、ポールは感官を通じて追加的情報を得ることなしに、「765-4321 だよ」と言うことによって応答するだろう。〉

なるほど、確かにこの条件文は、問題の命題的態度の説明として精度の高いものになっているのかもしれない。実のところ本稿筆者はこの点についての彼女の議論に納得していない^{*7}が、この点は本稿の議論の本筋に関わらないため、ここでは彼女の理論形成を追跡することを優先する。

次に立ちどころの問題は、理由と行動の因果関係が複数ありうる場合に生じる問題である。^{*8} スミスが「シアトルで雨が降るだろう」という信念を有しているとする。この信念を、次のような条件文で十分に説明できるだろうか。

〈ジョーンズがスミスの持つ唯一の傘を借りていて、スミスはシアトルに行こうと思っており、スミスはいつも雨に濡れずにいたいと思っているならば、スミスはジョーンズに傘を返してくれと頼むだろう。〉

答えは「ノー」である。例えば、スミスがジョーンズに傘を返してくれと頼んだとして、しかしその理由は、その傘をアベルに貸したかったからかもしれない。(そしてそのアベルは、ロサンゼルスでジーン・ケリーごっこをしたいと思いますと思っていて、スミスはそれに協力したいと考えたのかもしれない。) そうだとすると、先に掲げた条件文が真であっても、スミスはシアトルで雨が降るだろうという信念を有していないという世界がありうる。よってこの条件文は問題の命題的態度を十分に説明していない。

ここには一般的な問題が潜んでいる。つまり、条件文が、説明すべき命題的態度とは無関係な理由ゆえに真となってしまう世界がありうるのだ。この問題点を解消するにはどうすればよいか。ベイカーはここで、条件文を常に肯定文と否定文の対にして提示するという解決策を見出す。すなわち、次のような条件文

^{*7} ポールは電話帳を参照することでマリーの電話番号についての信念を得ていると考え、「拡張した心」理論に登場するノートを携帯するオットー (Clark and Chalmers 1998) と同様に、電話帳を含んだ言わば「拡張したポール」を一つの心的システムと捉えてみよう。ポールの同一性をどこに定めるのかという問題は付いて回るが、「拡張したポール」は電話番号についての信念を抱いているのであるから、ベイカーのそもそもの懸念は当たらないことになる。

^{*8} この議論は EA: 162-3 の記述に基づく。なお、同段落中の () 内の記述は、ベイカーの説明に基づくものではなく、ベイカーの説明を補強するために本稿筆者が追加した想定である。

ならば問題は回避される。

〈ジョーンズがスミスの持つ唯一の傘を借りていて、スミスはシアトルに行こうと思っており、スミスはいつも雨に濡れずにいたいと思っているならば、スミスはジョーンズに傘を返してくれと頼むだろう。なおかつ、先の条件文の前件部分(ジョーンズがスミスの持つ唯一の傘を借りていて、スミスはシアトルに行こうと思っており、スミスはいつも雨に濡れずにいたいと思っている)が真でない場合は、スミスがジョーンズに傘を返してくれと頼むことはないだろう。〉

先に問題にしていた、スミスがジョーンズに傘を返してくれと頼んだのはそれをアベルに貸したかったからであるという世界では、対になった条件文のうちの後者(「なおかつ」以降)が偽になる。ゆえに、この対になった条件文の連言全体がもし真となればジョーンズは問題の命題的態度を有していることになる、というベイカー説の趣旨は守られる。こうして、命題的態度を仮定法的条件文によって説明するという戦略はより洗練されたということになるだろう。

肯定的な条件文と否定的な条件文を二つ一組の連言にして命題的態度を説明するというこの戦略は、一般的な効力を発揮する。例えば、ジョーンズに唯一の傘を貸しているスミスはシアトルに行こうとしていて雨に濡れたくないが、たまたま脳に何らかの変調が生じて、それによってジョーンズに傘を返すよう頼んだというような可能世界について考えよう。そのような世界についても、この対になった条件文はうまく作用してくれる。すなわち、肯定的な条件文の方は真になるが否定的な条件文の方が偽になり、連言の条件文全体としては偽になってくれる。こうして、条件文は真なのにジョーンズは問題の命題的態度を有していないという可能世界を一般的に排除できるのである。

この対になった仮定法的条件文という案によって、ベイカーによる命題的態度の説明はひとまずの完成を見る。ただしこの案も、さらにもう一つの問題に直面することになる。ここで詳述はしないが、問題となっている命題的態度を問題の主体が有していないのに前半の肯定的条件文と後半の否定的条件文の両方が真となる場合がありうるというのだ。^{*9} こうした問題に対してベイカーは、譲歩的な応答をする。つまり、対になった仮定法的条件文は実際のところ、問題の命題的態度の説明としては十分ではないことを認める。しかし、態度を十分に説明する仮定法的条件文の解明を放棄するわけではない。いずれにせよ実践的實在論の眼目は、命題的態度の本性を明らかにできるのは仮定法的条件文の観点からの説明に他ならないという点にある。次章では、実践的實在論が背景に持つ意図と計画をより包括的に見てゆく。

3 ベイカーの實在論

ベイカーは、自身の実践的實在論を、命題的態度についての標準的見解(The Standard View)への代替案として提示している。標準的見解とは、一言でいえば、態度を脳状態によって説明する立場である。となると当然ながら、標準的見解の側から実践的實在論に対して、果たしてベイカーが主張するような仮

^{*9} EA: 163-168 を参照のこと。

定法的条件文の観点から脳状態などの実際の内的状態が完全に理解できるのかという懸念が提起される。ベイカーの返答はこうだ。彼女は、命題的態度が何かしらの実際の状態であることは否定しない。しかし、その実際の状態なるものを理解するには、仮定法的条件文に訴える方法こそが正しい。そして彼女は次のパースの文章を引用し、これに同意すると明言している。

信念は即座に私たちを行動させるのではなく、当の状況が生じたときに私たちが特定の方法で行動するように、私たちを条件付けるのである。^{*10}

ベイカーは、標準的見解と実践的実在論の要点を、四つの論点から対比的に列挙している。以下、それぞれの論点に付された番号ごとに対応して、両見解の対比を見て取れるようにまとめた。^{*11}

標準的見解：

1. 人が信念 P を有するのは、その人がある脳状態にあるおかげであり、その脳状態は信念 P であるか、ないしは信念 P を構成する (*constitutes*)。
2. 信念は人間の一部に存する。つまり、信念を保持するのは脳である。
3. 信念が説明能力を持つためには、信念は脳状態と「同型的 (*isomorphic*)」でなければならない。
4. 科学の結果が、信念が何であるのかを(もしくは信念なるものがそもそもあるのかどうかを)教えてくれるのを、私たちは待たねばならない。

実践的実在論：

1. 人が信念 P を有するのは、関連している真なる仮定法的条件文の集合体が存在するおかげであり、それらの仮定法的条件文は、信念主体が考えたり、何かをしたり、発言したりといった、幅広い志向的行為を遂行するであろう様々な状況に言及している。
2. 信念は人間の一部に存するのではない。信念は、行為がそうであるのと同じ意味で、人間の総体が持つグローバルな状態 (*global states of whole persons*) である。
3. 信念が私たちの実践において果たす役割ゆえに、私たちは脳状態についての仮説を顧みずとも、態度をやりくりすること (*manipulating*) によって行動をやりくりできるようになっている。信念の説明能力はこのことに由来する。
4. 私たちは、信念について裁定を下すために科学の結果を待つ必要はない。私たちの認知的実践を理解すれば信念とは何であるかが分かる。そして諸科学と日常の事柄におけるそうした実践の信頼性は、信念があるということを保証してくれる。

^{*10} EA: 171; EPI: 114. パースの“The Fixation of Belief” (1877) からの引用である。

^{*11} EA: 186-187 の記述に基づく。

これらの諸点について確認し、ベイカーがどうして標準的見解よりも実践的實在論の方が優れていると考えているのかを見てゆこう。ベイカーはそう主張する理由を二つ挙げている。

標準的見解と実践的實在論の最大の相違点は、態度を脳状態に訴えて説明するかどうかという点である(これは上記の両論の論点1にあたる)。標準的見解ではなく実践的實在論をとる第一の理由として、ベイカーは、「最も妥当な形式の標準的見解」でさえ、「せいぜい、何の説明上の意義も認識論的意義もない形而上学的理論にすぎない」と主張する(EA: 182)。「最も妥当な形式の標準的見解」とは、態度は脳状態から構成されるという見解だ。^{*12} 構成(constitution)とは、ここでは、ある対象とそれを組成している(compose)物理的要素との関係性をさす用語である。この考え方は、物理的対象を説明するのには向いている。例えば「ミシガン湖の水は H_2O から構成されている」と述べることは問題なさそうだ。しかし「しかじかの信念はしかじかの脳状態から構成されている」と述べるのには問題があるとベイカーは考えている。そのため、彼女は次のような事実を指摘する。すなわち、契約書は紙片から構成されているかもしれないが、だからといってそのことは、契約内容や契約の法的効力などの契約書の性質については何も明らかにしていない。こうしたことは志向的な対象一般に当てはまる。つまり、命題的態度などの志向的側面を持つ対象と脳状態の間には構成的関係があるかもしれないが、そうした構成的関係性は対象の志向的側面については何も明らかにしてくれない。信念を持つことは、契約することと同様、社会的な慣行であり、志向的である。物理的構成関係に訴えても、こうした事柄については十分な説明とならない。よって標準的見解は理論的には「怠惰である(idle)」(EA: 184)。

こうした議論を受け入れるならば、態度の説明は脳状態の観点からではなく仮定法的条件文の観点から行うべきだという実践的實在論の主張も納得しやすいだろう。ここから、前掲の論点2と3が導かれる。すなわち、標準的見解においては態度を脳という身体の一部の状態に帰着させて理解していたが、実践的實在論においてはそれを、ある人が受け入れている全人的な仮定法的条件文の集合の観点から理解する(論点2)。また、標準的見解からすると、信念が人間の行動をうまく説明してくれるのは、それが脳状態から構成されており、脳状態と行動の関係を科学的に解明できると考えられるからであるが、実践的實在論は脳状態ではなく仮定法的条件文のネットワークを解明する。この条件文のネットワークに照らし合わせることで、私たちは信念から行動を説明できるようになっている(論点3)。

続いて、ベイカーが実践的實在論を採るもう一つの理由を見てゆこう。彼女いわく、標準的見解は信念を持つことの必要条件を物理的な構成関係と取り違えるという、カテゴリー・ミステイクを犯している。ある種の脳状態を有することは、確かにある信念を持つことの必要条件かもしれないが、だからといって特定の脳状態が特定の信念を構成するということにはならない。脳状態は、特定の時空間的な位置を占める物理的存在である。他方、信念は「イギリス憲法と同様」(EA: 185)^{*13}で、物理的存在だけから構成されるのではない。標準的見解によると、信念帰属は最終的には脳状態についての仮説と見なされる。対して実践的實在論に従えば、脳がどのように組織化されているのかにはよらず、ある関連する仮定法的条件

^{*12} この議論は EA: 183-185 の記述に基づく。

^{*13} ベイカーは明示的に述べてはいないが、イギリス憲法においては慣習律が重要な役割を果たすという点を念頭に置いた記述であると思われる。

文の束が成立している限りにおいて、S は P と信じているということになる。私たちは態度というものに基づいてこれまでうまく行動を説明してきており、さらに、態度というものはこれまでに成功している認知的実践・社会的実践から構成されている。そういう観点から、信念をはじめとする態度は存在すると考えるべきである。

このようにベイカーの考えを概観してきて、実践的実在論の「実在論」の内実が見えてきたことだろう。彼女は、命題的態度は実在するが、それは時空間内の物理的対象として存在するのではなく、実践に基づいて形成された仮定法的条件文の束によって説明されるものとして実在していると考えている。こうした考えは、標準的見解からすると受け入れがたいものだ。信念は脳状態であるとしなければ、どういった意味で信念は実在していると言えるのか。ベイカーは、「因果的説明力を持つものは実在のものである」(EA: 217)と考えており、その上で、「信念は、投資が因果的説明力を持つと同じ意味で因果的説明力を持つ」(EA: 217)と主張する。^{*14}

ここでベイカーの念頭にあるのは、次のような例だ。すなわち、ある金融機関が倒産したとして、その倒産の原因はある投資活動(の失敗)にある、と説明できるとすれば、この「投資」は因果的説明力を有している。ベイカーは、志向的性質に言及している説明を「志向的説明」と呼び、これを、物理的状态に訴えて現象を説明する「物理的説明」と対比する。そして彼女の特徴づけによれば、命題的態度の性質は志向的性質であり、また、命題的態度というものがあることを前提している性質も志向的性質である(EA: 98)。いま取り上げている「倒産の原因はその投資にある」という説明は志向的説明の一例である。彼女の議論の眼目は、物理的説明が志向的説明に比べて「より深い(deeper)」のかどうかにある。つまり、この「投資」を、例えば口座間でお金を移動させるコンピュータ上の電気信号の働きに還元して説明することは、「倒産の原因はその投資である」と説明するよりも深い説明になっていると言えるだろうか。ベイカーは、「説明 E* が、E によって説明される現象のより深い説明になるのは、E が E* に随伴(supervene)する場合のみである」(EA: 130-1)と定義した上で、この問いに「ノー」と答える。仮に、その倒産を引き起こした「投資」が U 状態という電気信号の物理的状态によって構成され、「倒産」は F 状態という物理的状态によって構成されているとしよう。しかし、U 状態が F 状態を引き起こすという関係は、私たちの経済システムがあるからこそ成り立っている。その経済システムの無い世界では、「投資」であることは U 状態であることに随伴せず、また、「倒産」であることは F 状態であることに随伴しない。ゆえに、U 状態によって F 状態を説明することは、金融機関の倒産についてのより深い説明にはならない。実世界で F 状態が「倒産」を構成しているという事実があるとしても、そのことは、実世界での私たちの社会的・経済的な制度に依存している。倒産や投資が何かしらの物理的状态に随伴しているように思えたとしても、その基盤になっているのは、私たちの長年の経済実践が依拠してきた無数の具体的事例の持つ物理的性質なのである。

さらに、私たちの経済的実践を鑑みれば、金融機関の倒産の原因を知りたいと思うのは、将来において類似の事態を回避するためである。ベイカーも指摘するように、ある一つの投資活動が、無限に様々な物理的状态の組み合わせによって構成されることがありうる。例えば、ある投資を構成する電気信号の組み合わせは無数にありうる。となると、同様の倒産の事例が、全く相異なる物理現象によって構成されると

^{*14} この議論は EA: 217-9 の記述に基づく。投資と金融機関の倒産の例については EA: ch.5 の説明を参照のこと。

いうこと、そしてそれらの事例に全く相異なる物理的説明が付されるということがありうる。そう考えると、U状態はF状態を引き起こすといった物理的状态に訴える説明では、金融機関の倒産を予測することができない。他方、志向的説明は過去の実践に基づいて成立しているものであり、倒産や投資はそもそも倒産や投資として扱われるため、類似する実践が別様に扱われうるというような問題は発生しない。未来の予測という目的を考慮すれば、物理的説明より志向的説明の方が適切である。志向的説明には、物理的説明には代えられない利点がある。

以上を踏まえると、先に言及したベイカーの主張(「因果的説明力を持つものは実在のものである」「信念は、投資が因果的説明力を持つと同じ意味で因果的説明力を持つ」(いずれも *EA*: 217))は、次のようなことを述べていると解釈できる。すなわち、信念などの命題的態度は、志向的説明において活用するなかで因果的な説明力を持つ。そしてその意味で、命題的態度の実在性は認められる。以上が実践的实在論の中心的主張である。

こうした主張に対しては、態度を実践に基づく假定法的条件文の観点から説明することがたまたまうまくゆくからといって、態度が実在するとは言えないのではないか、との異論がありうる。ベイカーの応答は簡潔である。日常生活における主張も科学の主張も、体系的にそれなりに信頼の置けるものとなっている。これを疑うには、よっぽど特別な理由が必要となるだろう。そうした理由がないうちは、実践的慣行に訴えて態度を説明することは実在の説明になっていると考えるべきである。この議論の是非はともあれ、ベイカーの実在性の特徴付けとその意図するところは明確になったことだろう。

最後に、前掲の標準的見解と実践的实在論の対比のうちの論点4に注目しておきたい。論点4をめぐるベイカーの主張それ自体は分かりやすい。つまり、標準的見解は、態度を脳状態に訴えて説明しようとするので、私たちは科学が脳状態をより詳細かつ正確に解明してくれるのを待たねばならないことになる。他方、実践的实在論に従えば科学の結果を待つ必要は無いとされている。なるほど、それぞれの態度に関連する假定法的条件文は人間の実践を反省することで明らかになるのだから、脳状態の解明などを待つ必要は無い。ただし、この論点4で念頭に置かれている「科学の結果」とは物理学や化学や神経科学をはじめとする自然科学の結果ということであろうが、他方、実践的实在論の方の論点4で言及されている「諸科学」は社会科学をも含むだろう。本稿は、諸科学の探究実践において信頼性の確立された假定法的条件文の束によって態度を説明するという姿勢には賛成する。しかし、ベイカーはさらに、態度の説明は自然化を必要としないと主張している(*EA*: ch.7)。この点については本稿では同意せず、次章で述べるように、現代のプラグマティストが主張する自然主義を保持する立場と、さらにパースのスコラ的实在論を採り入れつつ態度についての科学的探究を継続する立場とを提示したい。

4 パース、ベイカー、自然主義

まず、本稿で提案しているパース的な命題的態度の理論とベイカーの実践的实在論の類似点を確認しておこう。本稿第1章にて、後期プラグマティズムの定式化を踏まえた命題的態度の説明として次の二つの形式のものを提案した。

〈1〉ある命題的態度 A の意味 M(A)は、「C ならば X」となる[C, X]の習慣的傾向性の総体(※C は状況入力、X は命令文)

〈2〉ある命題的態度 A の意味 M(A)は、「C ならば X」となる[C, X]の習慣的傾向性の総体(※C は仮定法的条件文の前件、X は would do の形で断言される仮定法的条件文の後件)

両者には一長一短があり、その違いは説明の目指すものの違いに由来する。〈1〉は命令文として規範的習慣を特徴づけるもので、心という記号過程が習慣を形成して自己制御を獲得してゆく姿を捉えるのに向いている。一方、〈2〉は、既に確立されている態度を説明するのに向いているだろう。今の文脈では、既に運用されている命題的態度を仮定法的条件文で書かれた傾向性の観点から説明する〈2〉の方が目的に適うだろう。そしてこれは、実践的実在論の提案するような、態度を仮定法的条件文の束の観点から捉える手法と基本的な発想は同じである。ただし、第2章で見たとおり、実践的実在論においては、仮定法的条件文は肯定文と否定文の対になっている形で構想される。よって実践的実在論の提案(〈PR〉)は次のように表せる。

〈PR〉ある主体 S が命題的態度 A を有するとは、「C ならば X、かつ C でないならば X でない」ということである。^{*15}

〈2〉と〈PR〉の間には二点の違いがあるが、本稿は、〈2〉に修正を加えつつ〈PR〉と両立させることを提案する。第一に、〈2〉は命題的態度の意味を説明しているのに対し、〈PR〉は主体 S が命題的態度 A を有するというものの意味を説明している。この空隙を埋めるには、〈2〉を、〈主体 S が命題的態度 A を有するとはつまり何を意味するのか〉を説明する理論として読み替えれば良い。この手順によって失われてしまう利点もあるかもしれないが、それが特定できていない現段階では、パース的な命題的態度の理論をベーカーの提案によって現代に受肉させられるという利点をまず優先したい。第二の違いは、〈PR〉では肯定文と否定文が一組になった仮定法的条件文が想定されている点である。これについては、本稿ではベーカーの提案を受け入れ、〈2〉も二文が一組になった条件文を使って定式化し直すことにする。こうして、次のような定式化を得られる。

〈2'〉主体 S が命題的態度 A を有するとはつまり何を意味するのか(意味 M(A))は、「C ならば X、かつ C でないならば X」となる[C, X]の習慣的傾向性の総体によって説明される。(※C は仮定法的条件文の前件、X は would do の形で断言される仮定法的条件文の後件)

^{*15} 具体例を一つ示すとすれば、次のようなものがありうる。(スミスが「シアトルで雨が降るだろう」という信念を有しているというのは、「C(スミスは唯一の傘をジョーンズに貸していて云々)ならばジョーンズに傘を返すよう頼むだろう、なおかつ、C でなければジョーンズに傘を返すよう頼まないだろう」ということである。)

以上、ベイカーの実践的实在論を利用して、パースのプラグマティズムに基づく命題的態度の理論を現代の文脈において再定式化した。この定式の有効性の是非については、今後の評価を待ちたい。

次に、实在論に注目する。パースの实在論と実践的实在論の主張する实在論には、類似点と相違点がある。まず類似点を確認しておこう。パースは、「スコラ的实在論 (Scholastic Realism)」という独特の实在論を支持している。すなわちパースは、私たちはみなこれまで握った掌を緩めると石は地面に落ちる、という経験を一様にし続けてきたということを指して次のように述べている。「正気を保った人間ならみな」、「常に石が落ちるとこの一様性は何かしらの実効的な一般原理のおかげである」と考えるだろうし、この一様性は、「自然中で一般原理が實在的に作用している (really operative)」ことを示唆している (EP2: 183)。パースはこうした考えを受け入れた上で、これを「スコラ的实在論」と呼ぶ。この考えを踏まえれば、パース的な命題的態度の理論は次のような主張となる。すなわち、命題的態度の意味は心の中で「實在的に作用している」一般原理によって確定し、この意味で心の一般原理と命題的態度は實在していると言える。

このように「スコラ的实在論」に基づいて命題的態度の實在性を主張するという議論の展開は、実践の観察に基づいて態度の實在性を主張する点で、ベイカーの実践的实在論と似ている。石を握った掌を緩めたところ石が落ちたという経験を観察し続けた結果、例えば重力の作用という一般原理が示唆される。

*¹⁶ このことを先の〈2'〉の方式で言い直せば、次のようになる。

「重力がこれこれの作用をしている」という信念を主体 S が有することがつまり何を意味するのかというと、その意味は、「S は、S が石を持った掌を緩める場合には、石が落ちると予測するだろう、なおかつ、掌を緩めない場合は、石が落ちるとは予測しないだろう」等の仮定法的条件文の総体によって説明される。

しかしながら、パースは「スコラ的实在論」の先に、科学的手続きによる自然法則ないし物理法則の解明を見据えている。そもそも科学的手続きにおいて用いられる諸概念を明晰化することが、前期プラグマティズムの時期から継続する、彼のプラグマティズム思想の要諦であった。ハーク (Haack 1992) は、パース思想においてどうしてスコラ的实在論が要請されるようになったのかを記述している。彼女の議論によると、早い時期のパースは様相論理における可能性概念などについて唯名論的立場を採っていたが、時期を経るにつれてこうしたものは唯名論では説明がつかないと考えようになり、スコラ的实在論を採るようになった。ハークの要約に従えば、パースのスコラ的实在論は、「實在の一般者がある (there are real generals)」という主張であり、ここでの「實在」とは、「思考から独立している」ことを意味する (Haack 1992: 22)。つまり、一人一人の人間が何を考えようとそれには左右されることのないものが實在である。これらのことを踏まえた上で、ハークは、スコラ的实在論の中心に次のような主題を読み取っている。

いかにして科学が可能となっているのかを説明するためにスコラ的实在論は必要とされるのだと、

*¹⁶ もちろん実際には、もっと精密な観察や実験による科学的検証手続きが必要になるだろう。

パースは考えている。[……]科学は、事物がどのようにあるのかを記述することだけでなく、説明することをも目指す。これはすなわち、科学は規則性についての真なる言明を求めるだけでなく、正真正銘の法則、真なる一般化をも求めるということであり、[そうした法則や一般化は]つまり、これこれの時には何が生じるか(what does happen when ...)だけではなく、仮にかくかくしかじかならば何が生じるだろうか(what would happen if ...)ということを述べている諸事例、あらゆる現実の事例だけではなくあらゆる可能的な事例をも支配するものなのだ。(Haack 1992: 24-5)

本稿第1章でも述べたように、後期パースのプラグマティズムの眼目は、理論的判断や知的概念の意味を直説法ではなく「～だろう(would)」を用いた仮定法で表すことにあった。これは、現実には生じている現象事例の記述だけでなく、可能的な事例についても言及できるような形で一般法則を明らかにすることが科学の責務であるというパースの考えと呼応している。「実在の一般者がある」とするスコラ的実在論は、そうした科学の営みを可能にするために要請される思想なのである。

他方ベイカーは、第3章で見たとおり、標準的見解との対比の論点4において、実践的実在論が次の主張を含むと述べていた。

4. 私たちは、信念について裁定を下すために科学の結果を待つ必要はない。私たちの認知的実践を理解すれば信念とは何であるかが分かる。そして諸科学と日常の事柄におけるそうした実践の信頼性は、信念があるということを保証してくれる。(EA: 187)

この「科学の結果を待つ必要はない」という主張は、信念を構成する脳状態が特定されなくても信念は実在すると言える、という主張である。しかし、ベイカーは、科学の探究が物理的状态の特定を目指す営みに限られるかのような狭い科学観に立脚しており、対してパースは、科学を「実在的に作用している」一般原理の解明の営みとして比較的広く捉えているように思われる。それゆえ、パースのような姿勢に基づけば、科学の結果こそ、信念の性質を、脳状態に帰着させるのではなく実践的な原理を明らかにするという形で明らかにしてくれるのである。この点で、両者の間には科学に対する姿勢の違いが見て取れる。

さらにこのことは、両者の自然主義の捉え方の違いにも結びついている。以下で述べるように、両者は表面的にはいずれも反自然主義を唱えていると理解されうる側面があるが、その内実は異なる。また、現代のプラグマティストの多くは一種の自然主義を唱えるが、それとパースの立場がどのような関係にあるかということも整理せねばならない。本稿は、これらのことを論じた上で、それに基づく結論として、パースのプラグマティズムが現代において持ちうる意義の一端を指摘したい。

ベイカーの実践的実在論は、命題的態度などの志向的存在者が、物理的存在としてではなく私たちの実践から明らかになる仮定法的条件文の観点から説明されるべきだという主張である。この主張を念頭に、ベイカーは、志向性は自然化される必要はないと論じている(EA: ch.7)。この点を踏まえればベイカーは反自然主義者だ。ただし、ここでの「自然化」とは、志向性を含む命題的態度を物理的存在と見なし、その物理的性質を科学によって解明するということである。実際のところ、このような意味での自然化を推奨

する自然主義は、ベーカーの批判対象である「標準的見解」の論者の中では共有されているのかもしれないが、現代のプラグマティストの多くが受け入れる自然主義とは異なる。

ここで、現代の有力なプラグマティストのひとりヒュー・プライス(Huw Price)が受け入れる自然主義の議論を見ておこう。プライス(Price 2013)は、現代の哲学において主張されている自然主義の主流は客体自然主義(object naturalism)であると述べた上で、自身としてはそれとは区別される主体自然主義(subject naturalism)を採用している。まず、ここでの(哲学的)自然主義とは、哲学は科学と何かしらの関連を持ち、そして、哲学と科学が同じ事柄に関心に向けている場合には、哲学は科学に従わねばならない、という考えである。ここまではプライスも反対しない。さらに、多くの自然主義者は次のことを主張する。すなわち、存在している全てのものは、科学によって研究される世界で尽くされる。そして、全ての真正なる知識は科学的知識である。こうした主張をプライスは客体自然主義と呼ぶが、この考えにのっとれば、哲学が扱えるのは、科学によって研究することのできる自然界の事物のみということになる。しかし客体自然主義は、「位置づけ問題(placement problems)」という難問に直面する。

もし実在なるものが究極的には自然的実在に他ならないのだとすれば、私たちは、道徳的事実や数学的事実、意味に関する事実などのものをどのように位置づけるべきだろうか。(Price 2013: 6)

すなわち、客体自然主義を採る限り、科学によって説明できる自然の中に、道徳的事実などを位置づけなければならない。プライスとしては「位置づけ問題」に客体自然主義の立場から応答することは困難であると考えており、それゆえ彼は主体自然主義を採用する。

客体自然主義には、哲学は科学が世界について何を語るのかを出発点とせよ、という考えが含まれている。それに対して主体自然主義は、哲学は科学が私たち自身について何を語るのかを出発点にせねばならない、と主張する(Price 2013: 5)。主体自然主義を採れば、位置づけ問題の起源が対象(object)そのものについての問いにあると考える必要はなくなる。つまり、対象そのものの性質ゆえに道徳的事実などがこれこれの位置づけを持つのだ、と主張するのではなく、私たち自身の性質を媒介にしてその位置づけを説明できるようになる。そして、こうした路線においてプライスが特に注目するのは、人間の言語実践である。プライスは、「位置づけ問題」の起源が言語実践にあるとする主体自然主義の捉え方を「言語論的捉え方(the linguistic conception)」と呼んだ上で、それを採用して次のように述べている。

言語論的に解釈すると、位置づけ問題は、日常言語の顕著な多重性に、つまり、混乱を招くほど話題が多元的であることに由来する。話者について自然主義的な捉え方をした上で、発話について表象主義的な捉え方をすると、位置づけ問題を客体自然主義の態度で存在論的に解釈することは避けられない。[…]

しかしながら、語り(the talk)を表象主義的に捉えないならば、この問題は非常に異なる形をとる。この問題は、言語論的な領域の中で、語り方、すなわち人間の言語行動の形式の多元性についての問題であり続ける。[…]これは、様々な言語ゲームが私たちの生においていかなる役割を果

たすのかを説明するという問題である。(Price 2013: 20)*¹⁷

本稿の目下の関心から、「位置づけ問題」に命題的態度の位置づけの問題を加えても良いだろう。道徳的事実や命題的態度について、それを物理的存在物に対応させて自然科学的見地から説明しようとする立場が、ベーカーの批判していた標準的見解の受け入れる自然主義に相当する。これはプライスの批判対象である客体自然主義に対応する立場でもあると見なせるだろう。ただしプライスは、自然主義は棄却せず、物理的存在物ではなく言説それ自体に注目することで、「位置づけ問題」に応答する。つまり彼は、諸言説を何かしらの役割のために発達した言語ゲームの一部とみなした上で、その機能や成立経緯、由来を説明することこそが、その言説の位置づけの説明に相当すると思われる。

実際のところ、ベーカーの考えはこの主体自然主義と整合的であり、これを受け入れるならば彼女は反自然主義を唱える必要が無くなるだろう。そのため、主体自然主義の立場から実践的実在論を引き受けるという、プラグマティストの命題的態度の理論を検討してゆく余地がある。今後は例えば、主体自然主義を受け入れつつプライスとは微妙に異なる考えを主張しているロバート・ブランダム（Brandom 2013）とのすり合わせを経た上で、実践的実在論あるいは本稿の提案する命題的態度の理論がブランドムの推論主義（Brandom 1994; 2000）とどのように接続できるのかなどを検討することが期待される。^{*18} しかし、その方向へ議論を進めることは別の機会に譲りたい。本稿では、その路線へ舵を切ることで見過ごされかねない、パースのプラグマティズムの反自然主義的とも受け取れる特性について指摘しておきたい。パースのプラグマティズムと主体自然主義の間には、基本的な考え方としては共通している部分がある（つまり実践に着目するという姿勢は共有されている）にも関わらず、微妙な緊張関係が存在しているのだ。また、このことは先に触れたスコラ的実在論の主張とも関わる。

この点を理解するためには、パースとクワインの認識論を比較検討したフックウェイの論考（Hookway 1984）が格好の手引きとなる。よく知られている通り、クワインの哲学は自然化された認識論を追求している（Quine 1969）。クワインの自然化された認識論とは、経験に先行する分析的なものを拒絶し、あくまで経験的事実の観察に基づいた科学によって世界についての知識を確立してゆこうという認識論である。こうした考え方は、知識を基礎づけ主義的に正当化することを拒絶し、可謬主義を受け入れる。他方、クワインとパース両方の思想を継続的に研究してきたフックウェイは、反自然主義を次のように特徴付ける。「自然主義の否定は、あらゆる特殊科学に先行していて、しかも自然についての一般的あるいは個別の事実を利用することなど全くありえないような認識論の可能性を認めることを伴う」（Hookway 1984: 1）。す

*¹⁷ この引用からも察せられる通り、こうした「位置づけ問題」への応答は、プライスの反表象主義の立場から導かれるものでもある。反表象主義と結びついた自然主義は、世界の客体(object)のありのままの姿を鏡のように映し出す(表象する)ことによって「位置づけ問題」に応答しようとする(あるいはそのような形で自然界に位置づけることのできないものについて「位置づけ問題」の応答を放棄する)のではなく、世界と関わる主体(subject)の言語実践において「位置づけ」がいかに行われるのかを説明しようとする自然主義である点で、主体自然主義である。

*¹⁸ 本稿では主体自然主義に議論を絞ったが、井頭(2014)はプライスの自然主義をさらに詳しく特徴づけ、(1)ミニマルな自然主義、(2)反表象主義的プラグマティズム、(3)形而上学的静寂主義、(4)グローバルな表現主義の四点の主張を指摘している。実践的実在論を現代のプラグマティストの自然主義と組み合わせる路線を追求する場合には、こうした諸点それぞれとの照らし合わせが必要になってくるだろう。

るところでの反自然主義とは、経験や科学に先立って存在する何かを措定する立場である。興味深いことにパースは、科学的探究は経験的事実に照らし合わせながら展開されると考えている点では経験主義的な考えを受け入れており、しかもよく知られているように彼はまさに可謬主義を受け入れているのにも関わらず、フックウェイの意味で反自然主義を唱え続けていた。実際パースは、その思想的経歴の最初期から最終盤に至るまで、論理学の基礎を心理学などの特殊科学に求めることを徹底的に拒絶している。^{*19} 少なくともこうした態度は、「認識論やそれに類するものは、まさに心理学の一章に、それゆえに自然科学の一章に収まる」(Quine 1969: 82)と主張するクワインの自然化された認識論とは対照的である。

ここで重要になると本稿筆者が考えるのは、パースの学問体系における「規範学(normative sciences)」の位置付けである。規範学は、美学・倫理学・論理学から成り、自然科学などの特殊諸科学をどのように展開してゆくべきであるのかを規定する学問である。この意味で、規範学は自然科学よりも基礎的な位置にある。ただしこれは安易な基礎づけ主義とは区別されるべきである。というのも、パースは可謬主義を依然として受け入れているからだ。科学的活動の正当化を説明する規範学と、それでもなお誤謬がありうるという可謬主義は、一見すると矛盾するように思える。この規範学と可謬主義という両輪はパース思想の中でどう位置付けられるのだろうか。

フックウェイは、常識的探究と科学的探究についてのパースの区別に注目している。常識的探究、つまり日常生活において行われる普通の探究においては、私たちは自分の実践的関心を満たす形で信念を確定できればそれで満足する。つまり、たとえ誤った信念であっても、それが短期的に実践的関心を満たすならば有効と見なされることがある。それに対して、科学的探究は実践における個人的な関心とは切り離して行われるべきものである。つまり科学的探究は最終的に正しい結論に至ることを目指すのであり、短期的に個人の実践的関心を満たすことを目指すわけではない。科学の方法とは、個人が、短期的に手にできるかもしれない自分にとって有用な帰結に安易に飛びつくことはせず、より広い探究者共同体全体の認知的進歩に貢献する存在として自己を理解することを含んでいる。実際パースは、論文「信念の固定化」(一八七七年)^{*20}において、「固執の方法」「権威の方法」「アプリアリな方法」「科学の方法」を検討した上で、それぞれに利点はあるが、最終的には「科学の方法」を選択するべきだと示唆していた。そして科学的探究において観念を明晰化するために提案されたものが、かの一八七八年の「プラグマティズムの格率」であった。

「信念の固定化」によれば、科学的探究は「實在」を前提としている。つまり、科学の方法を選択することは、實在のものがあることを引き受けるということを含意する。さらにパースは、論文「私たちの観念を明晰にする方法」において、實在概念にプラグマティズムの格率を適用し、實在とは「探究する者すべてによって究極的には賛成されるべく運命づけられている信念において表象されている対象」(*EPI*: 139)のことであるとしている。さらにこうした思想は、後のスコラ的實在論に結びつくものである。つまり、ハーク(Haack 1992: 24-5)が指摘していたように、パースにとって科学は、現に生じている現象を記述するだけでなく、将来にわたって生じうる可能的な事態をも考慮に入れた、自然の中で「實在的に作用している」

^{*19} このことについては、Hookway (2012: ch.5)に詳しい。

^{*20} “The Fixation of Belief”, *EPI*: 109-123.

(EP2: 183) 一般原理を突き止める営みである。そのような意味で実在している一般原理を突き止め、実在に関する知識を得るために、科学的探究の従事者たちはどういった規範に従わねばならないのか。そして、自己をどのような存在と捉えて自己制御を確立すべきなのか。哲学は、こういった規範的側面についても応答しなければならない。こうしたことが規範学に与えられた役割である。規範学は自然科学の探究を統制する学問であり、科学的探究は「実在」を前提した営みである。こうした考えゆえにパースは、自然科学に先行するものがあるという反自然主義を唱えたのである。

以上、フックウェイの論考を手掛かりに、認識論において自然科学よりも基礎的なものがあるとする点でクワインの自然主義とは対照的なパースの思想を見てきた。それではこの文脈で、主体自然主義はどのように位置づけられるであろうか。先に示唆したとおり、パースのプラグマティズムと主体自然主義の間には微妙な緊張関係がある。まずパースのスコラの実在論は、ハーク(Haack 1992)が論じるとおり、「実在の一般者」を突き止める科学の営みを可能にするために要請されるものであり、ここでの「実在」は「思考から独立したもの」とされている。他方、主体自然主義によれば、位置付け問題は「様々な言語ゲームが私たちの生においていかなる役割を果たすのかを説明するという問題」(Price 2013: 20)と見なされ、それゆえ実在も人間の多様な実践に応じて多元的に捉えられるようになる。多元的な実在の中には、人間の思考から独立しているとは考えられないものも含まれることになるだろう。少なくとも主体自然主義は、パースの考える科学的探究には適さないものをも実在と認めてしまう。ただし、両者は完全に背反するものでもない。というのも、パースが念頭に置くような科学的探究の実践を踏まえてスコラの実在論に適した形で措定される実在もまた、主体自然主義が許容する多元的な実在の一つでありうるからだ。以上を踏まえた本稿筆者の診断はこうだ。主体自然主義を採用した上でパースのスコラの実在論の立場をとることは可能であるが、そうした立場は、多元的な実在の一部、つまり「思考から独立した」「実在の一般者」を突き止める科学的探究へのコミットメントを伴う、オプションな立場なのである。^{*21}

ベイカーの実践的実在論は表面的には自然主義に反対しているが、プライスらの唱える主体自然主義を受け入れたうえで、実践的実在論を現代のプラグマティストたちの理論と接合させてゆくという道が一方にはある。しかしさらに、ベイカーがもともと主張した反自然主義は採らずに、それでいてパースの主張したスコラの実在論と実践的実在論を接続するという道を、本稿では提示しておきたい。スコラの実在論は、思考から独立した一般原理を明らかにするという科学的探究の営みのために要請される実在論である。この立場に立って命題的態度の理論を構築することは、態度を科学的探究の対象と見なすこと、思考から独立したものとして説明することを含む。それゆえ、本稿で示した〈2'〉の定式でなされる言明を、思考から独立している一般者についての説明として打ち出す立場が、スコラの実在論と組み合わせた実践的実在論に相当する。これは一見すると奇妙な主張に思われるかもしれない。というのも、そもそも態度は思考に関わっているように思われるからだ。しかし、〈2'〉の定式はプラグマティズムの格率を踏まえて導かれたものであり、そして、プラグマティズムの格率は科学的探究に資するよう観念を明晰化するために構想されたものである。本稿はこの定式を、命題的態度の観念を明晰化するものとして提示している。つまり

^{*21} 例えば、井頭(2010)が支持を表明しているような多元論的自然主義を受け入れた上で、科学的探究を進めてゆくための規範的思想としてこのスコラの実在論を採用するという立場が可能であると本稿筆者は考えている。

態度は、この定式化を経ることで、科学的探究が明らかにするものとしてふさわしい、思考から独立したものとして表される。あるいは、思考から独立した一般原理を突き止めようとする科学的探究によって、態度は、このような定式で表されるようになる。様々な態度それぞれには思考が含まれていることもあるだろう。しかし、〈2'〉の定式が述べる一般原理は習慣的に確立されている行動の傾向性に言及しており、これはその場その場の思考で自在に変更できるようなものではない。習慣的傾向性が思考に左右されないという限りで、態度には実在と見なせる側面がある。^{*22} スコラの実在論と組み合わさった実践的実在論は、態度の実在的側面に焦点を当て、それについて科学的に探究する道筋を提案する立場なのである。また、パースが念頭に置く科学は、実在を物理的対象と同一視する言明を直説法で述べる（例えば、〈これこれの態度はこれこれの物理的状態である〉と直説法で述べる）のではなく、仮定法で一般原理を述べる。このことを踏まえて本稿は、態度について述べられる一般原理を、仮定法を用いた〈2'〉の定式で表すことを提案している。以上をまとめよう。スコラの実在論と組み合わさった実践的実在論は、科学的探究を可能にさせる規範的な概念として実在を措定し、科学的探究によって、人間の態度の中で「実在的に作用している」(EP2: 183) 一般原理を明らかにすることを目指す思想である。そして、命題的態度についての一般原理は、パースの後期プラグマティズムとベイカーの実践的実在論を踏まえ、仮定法を用いた〈2'〉の定式で述べられる。こうした立場を、パース思想が現代の態度をめぐる議論において果たしうる独自の貢献の一つの姿として、ここに示す。

5 結論

本稿は、まず、パースの後期プラグマティズムに基づき、命題的態度の理論を構築した。その上で、この理論が現代の哲学的議論の文脈において持ちうる意義を明らかにするために、ベイカーの実践的実在論を検討した。実践的実在論は、プラグマティズムと類似した発想に基づいて命題的態度の理論を構築しており、本稿が提案するパースのプラグマティズムに基づく命題的態度の理論とも親和性が高い。また、ベイカーは、態度を脳状態に還元する「標準的見解」に反対しているという意味では反自然主義の立場をとるが、この立場はむしろ、プライスの主張するような主体自然主義と両立可能である。このことから、本稿が導き出した命題的態度の理論は、主体自然主義と組み合わせることによって現代のプラグマティストたちの議論状況に参入してゆくという道がありうる。しかしながら、パースは、ベイカーとは違った意味合いで反自然主義を主張していた。パースの反自然主義とは、科学的探究に先立つ規範、つまり科学的探究を統制する規範を措定する立場である。この立場は主体自然主義と両立可能であると本稿筆者は考えるが、同時にこの立場は、科学的探究を適切に進められるようにするためにスコラの実在論という特殊な実在論を主張している。このことから、本稿が提出した命題的態度の理論は、実践的実在論と結びつきつ

^{*22} とはいえ、長年の思考実践の積み重ねによって確立している習慣などの例を考えれば、習慣的傾向性が完全に思考から独立しているとは言えないだろう。ただし、そのような例においても習慣は一般性を帯びており、その習慣自体を思考によって自在に改変することはできない。本稿のこの箇所の趣旨は、態度には実在的な側面があること、そして実践的実在論にスコラの実在論を組み合わせる立場は、そうした側面についての科学的探究に光を当てるということである。

つも、スコラ的実在論に則って態度を科学的に探究し続けることを主張するという理論として現代に受肉する可能性がある。こうした理論にはパース思想独自の貢献の可能性が認められると思われる。

付記

本稿は、応用哲学会第10回大会（於・名古屋大学）での研究発表に基づく。

謝辞

本稿は、JSPS 特別研究員奨励費 16J04078 ならびに JSPS 若手研究 18K12181 の助成を受けて遂行された研究の成果である。

参考文献表

- [1] BAKER, L. R. (1995). *Explaining Attitudes: A Practical Approach to the Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [2] BRANDON, R. (1994). *Making It Explicit: Reasoning, Representing, and Discursive Commitment*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- [3] BRANDON, R. (2000). *Articulating Reasons: An Introduction to Inferentialism*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- [4] BRANDON, R. (2013). “Global anti-representationalism?”. In: H. Price, et al., *Expressivism, Pragmatism and Representationalism*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.85-111.
- [5] CLARK, A. and CHALMERS, D. (1998). “The Extended Mind”. *Analysis*, vol.58, pp.10-23.
- [6] HAACK, S. (1992). “Extreme Scholastic Realism: Its Relevance to Philosophy of Science Today”. *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, vol.28, no.1, pp.19-50.
- [7] HOOKWAY, C. (1984). “Naturalism, Fallibilism and Evolutionary Epistemology”. In: C. Hookway (ed.), *Minds, Machines and Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-16.
- [8] HOOKWAY, C. (2004). “The Principle of Pragmatism: Peirce’s Formulations and Examples”. *Midwest Studies in Philosophy*, vol.28, pp.119-136.
- [9] HOOKWAY, C. (2012). *The Pragmatic Maxim: Essays on Peirce and Pragmatism*. Oxford: Oxford University Press.
- [10] KATO, T. (2016). “Propositional Attitudes from a Peircean Viewpoint”, *Contemporary and Applied Philosophy*, v.8, n.2. pp.86-100.
- [11] PEIRCE, C. S. (1992). *Essential Peirce: Selected Philosophical Writing*, vol.1 (1867-1893), edited by N. Houser and C. Kloesel. Bloomington, IN: Indiana University Press. [本書に言及するときは

EP 1 と表記する。]

- [12] PEIRCE, C. S. (1998). *Essential Peirce: Selected Philosophical Writing*, vol.2 (1893-1913), edited by the Peirce Edition Project. Bloomington, IN: Indiana University Press. [本書に言及するときは *EP 2* と表記する。]
- [13] PRICE, H. (2013). “Naturalism without representationalism”. In: H. Price, et al., *Expressivism, Pragmatism and Representationalism*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.3-21.
- [14] QUINE, W. V. O. (1969). “Epistemology Naturalized”. In: W. V. O. Quine, *Ontological Relativity and Other Essays*. New York, NY: Columbia University Press, pp.69-90.
- [15] 井頭 昌彦 (2010) 『多元論的自然主義の可能性: 哲学と科学の連続性をどうとらえるか』、東京、新曜社。
- [16] 井頭 昌彦 (2014) 「「プラグマティックな自然主義」と3つの課題」、『思索』47 号、221～247 ページ。
- [17] 伊藤 邦武 (1985) 『パースのプラグマティズム』、東京、勁草書房。

著者情報

加藤隆文 (大阪成蹊大学芸術学部・講師)